

米西海岸のワインナリー所有は今やステータス

ジャーナリスト 三木寛郎

激しさを増す カリフォルニアワイン争奪戦

海外レポート



カリフォルニアワインの中心、ナパ・バレー

米国建国よりも長い歴史誇る

1976年、かの有名な「パリスの審判」によって世界に名を馳せたカリフォルニアワイン。

「パリスの審判」とは、英国人ワイン商のスティーヴン・スカリニアが、パリに開いたワインスクール「アカデミー・デュ・ヴァン」において開催されたイベントである。その背景には、スペ

用意されたが、フランス側は自分達が圧倒的に優位であるとの配慮から、米国産にハンディキャップを与えるべく、赤・白ともフランス4本対カリ

フォルニテ6本という陣容で対決は行なわれた。

用意されたワインはブドウ品種を揃えるべく、赤はカベルネ・ソーヴィニヨン、白はシャルドネが指定された。必然的にフランス側は、ボルドーの赤と、ブルゴーニュの白。いずれもこの国が誇る名シャトーの逸品ぞろいだ

1976年5月24日、会場とな

リュアの片腕だったパトリシア・ギヤラガードという米国人女性がおり、さら

にこの年は米国独立200周年に

当たったことから、さまざまな記念イベ

ントの一環として、カリフォルニア

ワインとフランスワインを目隠しで飲

み比べようという企画が持ち上がっ

たのである。

赤、白それぞれ10本ずつワインが

用意されたが、フランス側は自分達

が圧倒的に優位であるとの配慮から、

米国産にハンディキャップを与えるべく、赤・白ともフランス4本対カリ

フォルニテ6本という陣容で対決は行

なわれた。

用意されたワインはブドウ品種を

揃えるべく、赤はカベルネ・ソーヴィ

ニヨン、白はシャルドネが指定された。

必然的にフランス側は、ボルドーの

赤と、ブルゴーニュの白。いずれもこの

国が誇る名シャトーの逸品ぞろいだ

1976年5月24日、会場とな

る。パリ・インターベンチネンタル・ホ

テルのパティオで始まった試飲会で、

まず「白」の順位が発表された。何

と1位になったのは、シャトー・モン

テレーナというカリフォルニア産のシ

ヤルドネだった。続いて行なわれた

「赤」の部でも、1位に輝いたのはス

タグス・リーブ・ワイン・セラーズの

カベルネ・ソーヴィニヨン。当時は全

く無名だったカリフォルニアワインが、

赤・白ともバーナー・モンラッシャ、

ムートン・オー・ブリオンといった、

フランス最高峰のワインを退けてしま

つたのである。

「パリスの審判」のニュースは世界

中を駆け巡り、カリフォルニアワイン

のブームが起つただけでなく、世界

のワイン市場が大変革を遂げ、いわ

ゆる新大陸のワインが次々と名乗り

出ることとなるのだ。

「新大陸産」とは言え、カリフォ

ルニアワインの歴史は実はかなり長い。

その創世は1769年、フランスコ

派修道士達がサンディエゴに最初の

伝道所を作り、聖餐用ワインのため

にぶどう畠を拓いた時とされている。

1840年代後半にはカリフォルニア

にゴールドラッシュが起り、一攫千

金を夢見る人々の流入によってサン

タグス・リーブ・ワイン・セラーズの

カベルネ・ソーヴィニヨン。当時は全

く無名だったカリフォルニアワインが、

赤・白ともバーナー・モンラッシャ、

ムートン・オー・ブリオンといった、

フランス最高峰のワインを退けてしま

つたのである。

「パリスの審判」のニュースは世界

中を駆け巡り、カリフォルニアワイン

のブームが起つただけでなく、世界

のワイン市場が大変革を遂げ、いわ

ゆる新大陸のワインが次々と名乗り

出ることとなるのだ。

「新大陸産」とは言え、カリフォ

ルニアワインの歴史は実はかなり長い。

もちろん、ワインの需要も大幅に

増加し、それまでブランやアブリコッ

トを栽培していた果樹園が、次々と

ぶどう畠に変わつていったのだ。

禁酒法時代には多くのワインナリー

が廃業の憂き目にあつたが、それで

も個人の飲料用、礼拝用のワインの

生産は認められており、ブトウの栽培

もジュース用などとして生き残つて

いたことから、大恐慌や世界大戦を

経て、今や名産地として名高いナバ

ソマ周辺に多くの醸造家達が集ま

るようになり、ワイン 자체の品質も

どんどん向上していく。

それでも1970年代中期までのカリフオルニアワインに対する大方の評価は「スクリューキャップの安価なワイン」というもので、なかなか高級レストランなどでは扱つてもらうことのないものだった。

その評価を一気に覆し、カリフオルニア、そして世界のワイン市場を一気に塗り替えたのが、前出の「パリスの審判」だったのである。

投資対象となつたワイナリー

カリフオルニアワインの評価を一気に高めた「パリスの審判」以降、カリフオルニア、特にナバ・バレーやソ



日本や韓国、中国の投資家も大金を注ぎ込んでいる

間1万ケース以下という少量生産なのだ。

特異な例では、年間数100ケースというごく少量生産の「カルトワイ

という高値で取引されている。

そうした状況下、多くの著名人も

ワインナーのオーナーになつて

ノマ周辺には名門と呼ばれるワイナリーが出現し、それまでフランス語でシャトーと呼ばれていた醸造所が世界的にも英語のワイナリーと名を変えるまでになつた。

そうした時代の流れの中で、カリフオルニア州に対する世界の大手からの資本導入も進み、欧州そして日本からも多くの企業がこの地のワイン産業に進出して行つた。

わけても有名なのは、地元のモンダ

ヴィとフランス・ボルドーのフィリッ

ープ・ド・ロチルド男爵が設立したオ

ー・バス・ワンだらう。米国最高峰と

言われる品質は世界でも人気である。

カリフオルニアワインの特徴の1つは

生産量の少なさにある。フランスな

ど欧州では、1つのシャトーが年間数

万ケースを生産する例が大半だが、

こちらではほとんどのワイナリーが年

間1万ケース以下という少量生産な

のだ。

カリフオルニアワインの評価を一氣

に高めた「パリスの審判」以降、カ

リフオルニア、特にナバ・バレーやソ

ゴッドファーザーで知られる映画監督フランシス・フォード・コッポラは、1975年にナバの名門「バム・エス

グドライバーのマリオ・アンドレッティもナバのワイナリーのオーナーの一

人である。その他にも多くの著名人達がカリフオルニアのワイナリーを所

有している。

最近ではアジアからの投資も多く、

日本、韓国、中国出身の成功者た

ちが保有するワイナリーが出現して

来ている。そうしたアジア出身のオ

ナー達が重視しているのが、母国

のマーケットだと言う。

韓国系の実業家オーナーは米国内

での小売は行なわれていないそうだ。

中国系のワイナリーも中国国内にマ

ーケットを絞つた展開をしており、

中国国内におけるワイン人口の増加

と共に市場拡大を図る方針のようだ。

カリフオルニアは地域的にもアジアの

市場に近く、アジア出身の成功者達

がナバやソノマを中心とするカリフオ

ルニアのワイン生産に大きな影響を

与える存在になることは間違ひなさ

そうである。

これまでEUが大きな輸出先となつ

ていたカリフオルニアワインは、これ

までも大きかつた日本のマーケットに加え、中国、香港、韓国などアジア諸国への輸出が増えることが予測されている。

確かに、一時期は大きなブームとなつたワイン投資という潮流も沈静化してしまつたと見る向きもあるが、それはフランスのボルドーワインに限つたことであつて、カリフオルニアワイ

ンには当てはまらないようだ。

しかししながらワインは基本的に農

産物であり、2017年後半にカリ

フオルニアを襲つた山火事のよう

に自然災害の影響も受けれるし、天候の変化にも左右される。さらに、出来の

よい年とそうでない年では、市場価

格に大きな変動が起きることも確か

である。それでもワイナリーのオーナーになることに夢を抱く投資家が

後を絶たないのは、そこに投資と言

う以上の何かがあるからなのだろう。

カリフオルニアに限つた話ではないが、

ジョニー・デップ、布拉ッド・ピット、

ステインケ、デビッド・ベッカムなどは、

個人用にブドウ畑やワイナリーを所

有しているという。

ワイナリーへの投資やその所有は、

成功者達のロマンあるステイタス

ブルとなつているのかもしれない。